

野辺の民間信仰・路傍の神々

村越 信子

(平成10年9月30日受理)

A popular belief in a field

Nobuko MURAKOSHI

(Received on September 30, 1998)

はじめに

道は人々を遠くへと導き、さまざまな物質や情報など文化といわれるものを運んできた。また、この道は、政治面では支配統治のために、時には軍事戦略のために大きな役割を果たしてきた。

この道のほとりに、十字路に、分岐に、峠道に、橋のたもとに、人々がさまざまな事柄を祈願して安置されたと思われる種々の石造物を目にする。

筆者は機会あるごとに、国内各地の山里やヨーロッパ(特に南ドイツやオーストリア)の山里を訪ね、多くの峠道や各種の街道を、ある時は徒歩で、またある時は車で通ったときさまざまな石造物を目にする機会を得た。ヨーロッパの道では“ビルトシュトック”(ドイツ語・Bildstock)または“カルヴェール”(フランス語・Calvaire)といわれる、日本の道祖神や後世の石地藏等にも通じる十字架像に出会った。神とも仏ともいい難い可憐なこれらの像に温もりを感じた。これらの“ビルトシュトック”や“道祖神”といわれるものは、その村々の生活者にとってどのような信仰の対象であるのか、そしてどのようにして設置されたのか、興味が尽きない。筆者はキリスト教に対して異教徒ではあるがあえて比較検討することを試みた。内在するところまでの考察には力不足であるが「野辺の民間信仰・路傍の神々」と題し考察してみることにした。

I 人々の移動と神々

道は人間の最もすばらしい創造物の一つである。道は数千年を通じて人間と共に発展し、人間を助けてその生活領域を拡大し、他の人々の生活領域と連絡する役割を

果たしてきた。

あらゆる道は、土地と人間との間を目に見える形で結び、人間の移動のみならず、物質の輸送、情報の伝達という大きな役割を担う形で造り上げてきた。この道は人々の生活に欠くことのできない大切な機能である。その道は神聖なものとして、道端に祭壇を作り、道の十字路には道標を立て、道ゆく人々の安全などを祈願して、“ビルトシュトック”や“道祖神”といわれるものが建てられてきた。

この論では欧州の“ビルトシュトック”とわが国の“道祖神”に焦点をあててみたい。

この道を使った人々の行為を示す古くからの言葉に「タビ」がある。このタビは人々の移動を現わしている。人々の移動の初めは、一日で往復できる範囲の往来であったが、やがて延長されて山を越え峠を越えて隣国へも移動するようになる。タビの初期の段階では、日暮れては野宿するのが自然であったが、当然それは飢えや危険や困難をともなうことを覚悟せねばならない野宿であった。

人々は自然界には、それぞれあらゆる所に「神」が存在していると考えていた。たとえば野宿する場合、神がつかさどる場所を一夜借りるために自分が横になる場所に円を描き、神への目印とする。その範囲内は神が守護してくれる場所となり、安心して一夜の宿となりうるのである。この時代のタビは、今日とは想像を絶するほどの行路病死者も多く、また、峠口の村里の人たちは、旅人やその病死者たちを穢れとして恐れ、死体はそのままに放置し、我が身にふりかからぬようにしたのが現実であったろう。

鎌倉時代から室町時代になって、貴賤の別なく往来の人々も増えたが、旅宿の施設は整備されることはなかった。また医療制度も整備されていない時代のタビは、今

日からすれば想像もできないほど危険なもので、野たれ死ぬことを覚悟しての旅立ちであったはずである。

昔のタビビトは神信心が厚かった。あらゆるところに存在している神は、道には道を守る神があり、陰阻な峠にはその峠を守る神が、そして邪悪な神から村を守る神が存在していると考えていた。この種の神として、代表的なものがわが国では“道祖神”といわれるものである。この神は「古事記」や「日本書紀」などには、フナドノカミ（岐神）・ドウロクジン（道陸神）と記され、天孫降臨神話に登場するニニギノミコト一行の道案内役としている。また、サカエノカミ（塞の神）とも呼ばれ、村の境域に置かれ外部から侵入する邪霊、悪鬼、疫病などを阻塞する神なのである。道の辻などに祀られているが、行旅の守護神であるとされたのは、後代になってからのようである。

すなわち、今日でも道祖神を祀ってある場所を見ると必ずしも路傍に建っているわけではなく、往々にして山中奥深いところにあり、山より降りてくる邪悪神を阻塞して、集落の平穏を期するための神の役割も果たしているのである。いずれにしても平安時代以前には、このような偶像は路傍には建っていなかったようである。

ヨーロッパ大陸においては、ライン河、ドナウ河それにいくつかのアルプスの峠道などを、前ローマ時代からギリシャ人、ローマ人、ゲルマン人がしばしば移動していたが、おのずとそれぞれの民族で、道についての考え方が違っていただろう。ヨーロッパにおいては、古くから神の存在は、常に山上にあったから、古代の人々の生活も神に近くて神祀にふさわしく、また政治の場にもなりえた小高い丘陵地帯への道を造った。ギリシャ人やローマ人にとって、その人々の移動のための道は神聖なものであり、道のそばに墓を建ててもらうことが大変名誉であった。ギリシャ人は道を神聖視していたから、十字路にテセウスと道の神のアポロンのために祭壇を造った。この同じ十字路がゲルマン人にとっては、呪われた場所であった。絞首された罪人がぶらさがってカラスに突かれているのも十字路なら、無数の伝説で悪魔が人間を誘惑しに近づくといわれるのもこの十字路、自殺者を葬る場所も十字路であった。

II 路傍の神々（欧州編）

南ドイツやオーストリア・フランス・スロヴェニアなどを旅すると、集落の出入口、峠道や畑道の十字路、

橋のもと、小高い丘などで石造りや木造りの“ビルトシュトック”（カルヴェール）に出会う。そんな時、かつて道祖神たちに出会った時に感じた、体温のぬくもりにも似た暖かさを感じ、ほっとさせられる。

これらのビルトシュトックには、木製の十字架に架けられたキリスト像やマリア像が三角屋根の下に取りつけられた仮称・十字架型とでも呼ぶべきもの〔写真1〕、四角あるいは六角のコンクリート製の柱に鳥の巣箱を取り付けたような仮称・巣箱型と呼ぶべきもの〔写真2〕が見られ、この巣箱型には二段や三段のものがあり聖書の物語が描かれている。長い石の柱のほっそりした石灯籠のようなタイプの仮称・灯籠型〔写真3〕、これは墓地の灯明台に起源があるといわれる。一辺が2メートルもある大きな祠は内部に腰掛けまであり、立派な鍛鉄細工の扉がついたり、ガラス張りとなっているものもある仮称・祠型〔写真4〕。この祠の中にはキリスト像やマリア像、聖書の物語を描いたものなどが飾りつけられ、いつも新しい花々やローソクなどがたむけられている。巣箱型、灯籠型、祠型の屋根には、いずれも立派な十字架が掲げられている。

オーストリア〔地図1〕のケルンテン州・シュタイヤーマルク州・オーバーエスライヒ州の山里では、集落の出入口には必ずというほどビルトシュトックが建てられている。この地域では巣箱型・灯籠型・祠型が多く、フランスのブルターニュ地方では石製や鉄製の十字架型が圧倒的に多いようである。また、スロヴェニアのオーストリアに接する山岳地帯の山里にも巣箱型や祠型が数多く目に止まった。

クラーゲンフルトの近郊ラウンスドルフ村の幹線道路の交差点に、道路標識と並んで建っている八角形のビルトシュトックは、交通安全祈願の現代版で、特に印象的であった〔写真5〕。

南ドイツ、ロッテンブルクのアルトシュタットの山上の古びた教会に登っていく山道には、ほぼ等間隔で長方形の石祠が並んでいて、その中に受胎告知にはじまってキリスト受難の場や復活昇天など14の情景が素朴単純な形で描かれているのである¹⁾。

これは「クロイツ・ヴェーグ」と呼ぶそうで、「キリストの道行」ということである。西国巡礼などの代わりとして、寺の道に観音などがその数だけ並べられて、それをお詣りして巡礼をすませるのと同じ発想である。

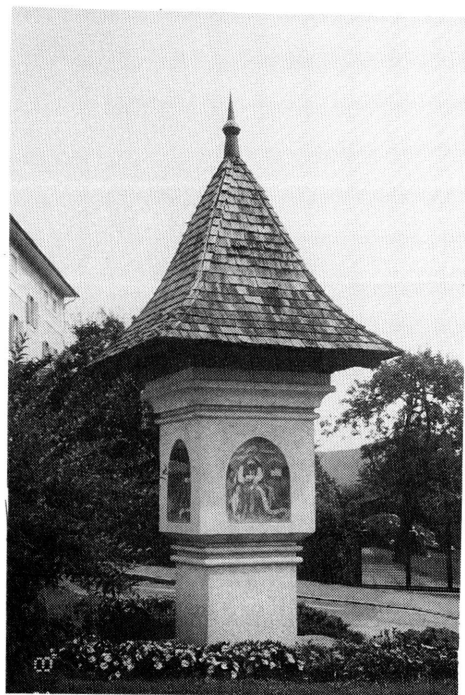
十字架がまだキリスト教の象徴となり得なかった古い



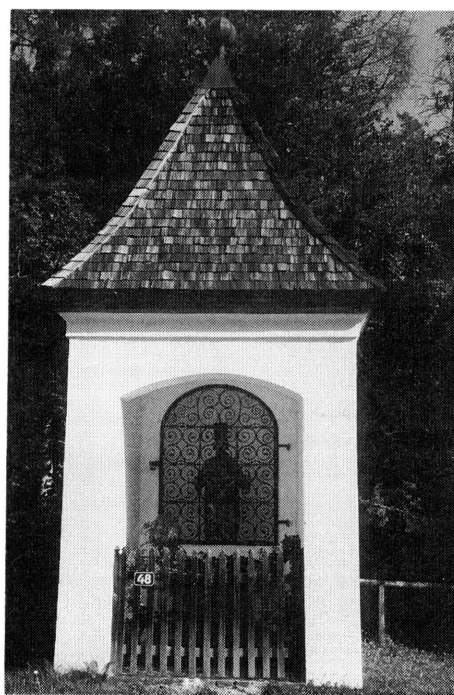
十字架型〔写真1〕



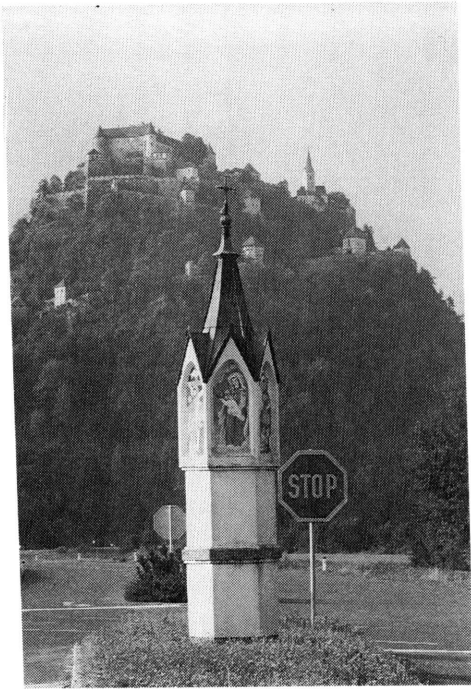
灯籠型〔写真3〕



果箱型〔写真2〕



祠型〔写真4〕

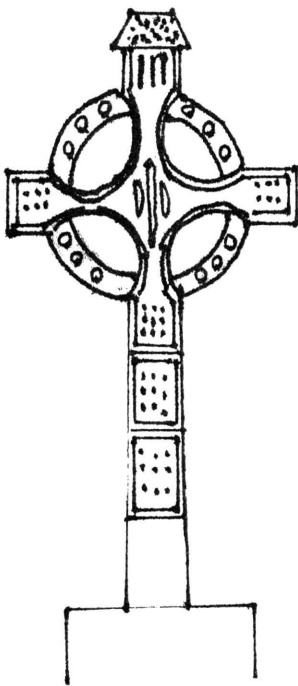


〔写真5〕

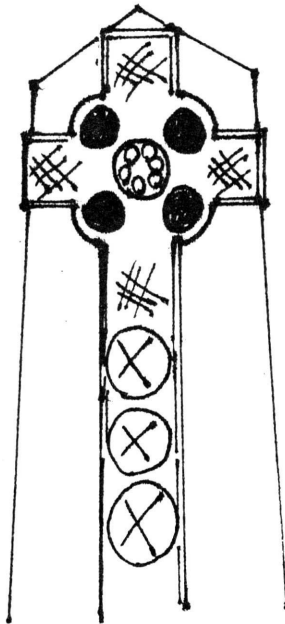
時代のヨーロッパの人々は、森の生活にデーモン（悪魔）を見た。十字をきって、木や石に呪文を封じ込め、何らかの災から救ってくれる「魔除け」という効能を期待して祈りを捧げたと思われるのである。

ヨーロッパの文化の底辺には、ケルト文化が脈々と生き続けている。古のヨーロッパはケルト文化が主流であった。その後ローマ人やゲルマン人などが勢力を広め、ケルト文化を急速に衰退、変質させていったが、ローマ人やゲルマン人の手が比較的及ばなかった、アイルランドやブルターニュという辺境の地ではケルト文化がなお長い期間保たれてきた。“ケルトの十字架”が今なおアイルランドやブルターニュに見ることができる〔図版1〕。この呪術的な自然宗教的な素朴な人々の信仰の対象物は、時代を経てキリスト教と習合し、現在、南ドイツやオーストリアの野辺で多く見かける“ビルトシュトック”となったのであろう。

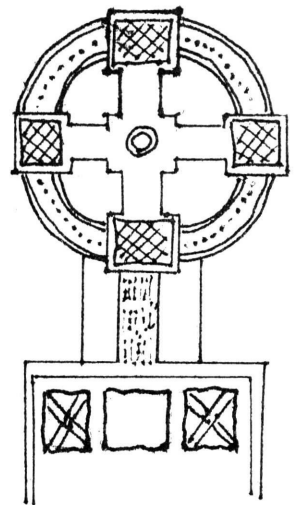
十字架の原点である「十字」は、神のよく分かる目印を作って神を迎えるという素朴な発想から作り出されたものであろう。円形の聖地の中心に、聖樹を立てた祭壇すなわち“曼陀羅の世界”をあらわしている。そこは大宇宙を観ずるために作られた小宇宙であり“神の座”で



アイルランド



スコットランド



ウェールズ

〔図版1〕 ケルトの十字架

ある。古の人々は目に見えぬ神が地上にやって来たとき、落ち着くべき座を知らせなければならぬと考えて、聖なる地を卜占して選び、その中央に樹木を立てたり、巨石を立てたりして、目印とした²⁾。

神によく分かる目印を作って、神を迎えなければならない。よく分かる目印は神自身によく似た形でなければならない。十字はその最も具体的な表現である。十字は縦横に二線が交差して、火と水、生と死、男と女といった二元的な性格を持ち、同時にそれらを結合する存在、円環または球体として表現した形である。それを聖地の境界において、人々は神との出会いの場を示したのである。

人が十字を切る美しい姿を目にする。この十字を切るという姿は、目の前にある靈魂の善悪をみわけ、善意を招くための所作なのである。そこに悪意があれば遠ざけようとするのである。このような神を導くための目印が、十字であり円環でもあるのである。十字も円環もそれぞれ別のものである。人間が世界を東西南北に分けたり、季節を春夏秋冬に分ける時間空間を認識して、自己の存在を確かめるのも全体を認識するための働きかけである。

オーストリアのザルツブルグ州・シュタイヤーマルク州・オーバーエステライヒ州の三つの州にまたがる「鉄の道」と呼ばれる中世の時代から鉄の製造と鉄の加工が盛んに行われた地域がある。その地域に続くザルツカンマーグート（いい塩の貯蔵庫という意味）と呼ばれる景勝地にあるハルシュタット村は「ケルト人は紀元前1世紀の半ばに、ローマのカエサルに敗れて以来、徐々に歴史の表舞台から姿を消し、幻の文化となったが、19世紀半ば、考古学上貴重な大規模な墳墓遺跡が発見された」場所である。このオーストリアの地域で毎日呼吸し、ビルトシュトックをながめているうちに、ビルトシュトックの原点はこのケルト人の文化にあるのではないかと実感させられた。歴史上、最初のケルト文化圏が形成された紀元前8世紀から6世紀末にかけてを「ケルト文化のハルシュタット期」とよんでいるほど重要な地域なのである。この地に出かけたことで、ケルト文化は大変高度な製鉄技術を持ち、武力、経済力を誇っていたことが実感できた。しかしながらケルト文化の詳細に関しては次の機会に言及したい。

III 路傍の神々（日本編）

昔のタビは今とは道路事情や、宿泊施設・医療面でも想像を絶するほど危険を伴うものであったと想像できる。わが国でも、道には道を守る神があり、陰阻な峠にはその峠を守っている神が存在していると考えられていた。そのような道中の人々を見守る神として造られた石造物を今でも多く見かけることができる。道祖神、庚申塔、供養塔などがあげられる。これらは時代とともにさまざまな習合と変化を繰り返し、複雑化して分類しにくいところもあるが、この論ではこれらを一括して“道祖神”として論を進めることにする。

特に信州や信州との境に近い甲州の農村や山村の路傍や山中の坂道の処々に、道祖神が建てられ、その前に手折った草花や榊などの小枝が立て掛けられているのを目にする。現在では道の辻だけではなく、神社や寺院の境内、お堂の周囲にも変化に富んだものが存在し、庶民の生活の中に生きづいている。しかし残念なことに今では、都市化によって路傍の道祖神が近くの神社や寺院の境内に移されているものも多く、初期の目的が分かりにくくなってきている場合も見受けられる。

前に述べたように道祖神とは、サエノカミ（塞の神）、ドウロクジン（道陸神）、フナドノカミ（岐神）などとも呼ばれ、村の境域に置かれ部外からの侵入する邪悪、悪鬼、疫神などをさえぎったり、はねかえそうとする民俗神である。造形形態としては、陰陽石や丸石などの自然石を祀ったものから、浮彫り型（舟型・角柱型）のもの、庚申塔と字をそのまま彫り込んだものまである。男女二神の結び合う姿を彫り込んだもの（双体道祖神）まで、この神の造形は多様である。ちなみに、現れるのは後世のことであるが、一方、特に地蔵の信仰は、実際にどの地方へでかけても、優しい地蔵の道祖神が道の端にたたずんで、生きている人々を見守り、墓の入口に並んで死んだ人々を導く姿を目にするのである。地蔵の原信仰はインド古来のバラモン教の万物を育成する大地の神であり、また、アーリア民族の大地母神で疫病を治し怨敵を調伏せしめる女神であるから、たくましいのである。これが大乘仏教にとりいれられて、大陸を経由する間にさまざまな民俗信仰と習合し、安産や子育てを願ったり、延命や息災を祈願すればかなえてくれるばかりでなく、農耕社会では、農繁期には農耕に従事してくれたりするのである。

足利尊氏が戦勝祈願に、この地藏尊を厚く信仰したことは有名で、路傍に地藏尊を建てることも尊氏が始めたともいわれている。これらは一ヶ所に留まっている神であるが、その神が村々や家々をめぐり歩く「石占地蔵」「廻り地藏」と呼ばれる信仰も明治時代以降に始まったようである。

その一例は、上野桜木の東叡山浄名院（上野寛永寺三十六坊のひとつ）にある石占地蔵（おうかがい地藏）である〔写真6〕。おうかがい地藏とは、尊形は石の地藏で御身八寸御蓮台三寸、総丈一尺の小さな石地藏である。もともと三体あってその一体が寺に留まり、二体は家々を廻っていたとのことである。現在では〔写真6〕のように三福殿に、重ね座布団の上に衣装をつけて鎮座している。



おうかがい地藏〔写真6〕

御うかがい地藏さまについて

うかがわれる人は、他の人に伺って貰ったり、他人と行って貰っては、いけないことになっております。

先ず熱心にお祈りされ、願いの趣を述べ、台の両方の穴に両手を入れ、台とも数度お上げする。

軽く上がれば願いが叶い、重ければ叶はないものと御判断下さい。

当山主

まさしく地域の組織と結びついており、民俗の根幹に通じるものといえる。

民間信仰は、地域の実情に応じながら日本人の生活の中に深く根づいている。

これらの道祖神は境界的、両義的な特性をもち、日本人の伝統的空間意識や時間観念にまで及んでいる。村境にあって、外から訪れる負（マイナス）の価値をさえぎるときに力を発揮する神でありながら、一方では、道祖

神の祭りには、道祖神自身を悪霊だと考えて小正月の火祭りの火中にくべられる祭りもある。境界領域を呑み込んでしまう両義性の存在が必要となる。このように村内に侵入しようとする疫病を防ぐとともに、道標としての役割をも果たしている。その他、多産な豊饒の力も持っていてたくましい神なのである。またこの神は多くの場合「石」をもって表現されている。日本の民俗の中で、この「石」は、生命あるものと生命のないもの、人間の世界と死の領域、地上と地下などの中間に位置して、二つの異質の領域をつなぐ越境性をそなえた物質としてとらえられていたようである。江戸中期以降、特に石工の技術が進み複雑化した造形も多くなり、多種多様な道祖神が造られるようになったひとつの理由といえよう。

IV 民間信仰について（結び）

宗教は一般に、一定の教義を創唱した教祖の布教活動によって結成された信徒の組織的教団をもっている。ところがこうした既成の創唱的宗教と比べ、それとはまったく対照的な信仰が一般民衆によって支持されている。それらの多くは、きわめて呪術的であり、かつ自然宗教的である。そして何よりも教義とか教祖というものが存在しない。それでありながら一般民衆のあいだに広く行きわたっている信仰は決して少なくはない。論を進めてきた欧州のビルトシュトックと日本の道祖神との対比は極端であったかもしれないがそれぞれの民族の中で、同じように大切に守られていることを実感させられたのである。この民間信仰は、民族の宗教生活に大きな影響を与え民衆の生活形態や機能、更にものの考え方などを大きく規制してきた。

ビルトシュトックや道祖神を含め、民間信仰の共通点として、まず第一にあげられるのは呪術的性格である。自然宗教的な民間信仰において、山・木・石・水・火などを崇拝するのは、それらが極めて強い呪術的性格をもっていると信じるからである。

第二の特色として、信仰成立の契機や発展の要因に、現世における平安で豊かな人間生活への要求が強く感じられることである。宗教的精神的救済を現実的に解釈して、人間の世界から病氣悪霊を追い払い、民衆の生活に利益をもたらすものとして解釈することである。

第三に、福運をもたらす神を求めるようになる。福運の具体的表現は、農耕社会においては、米など穀類の豊饒であり、漁撈社会では魚介類の豊漁である。こうした

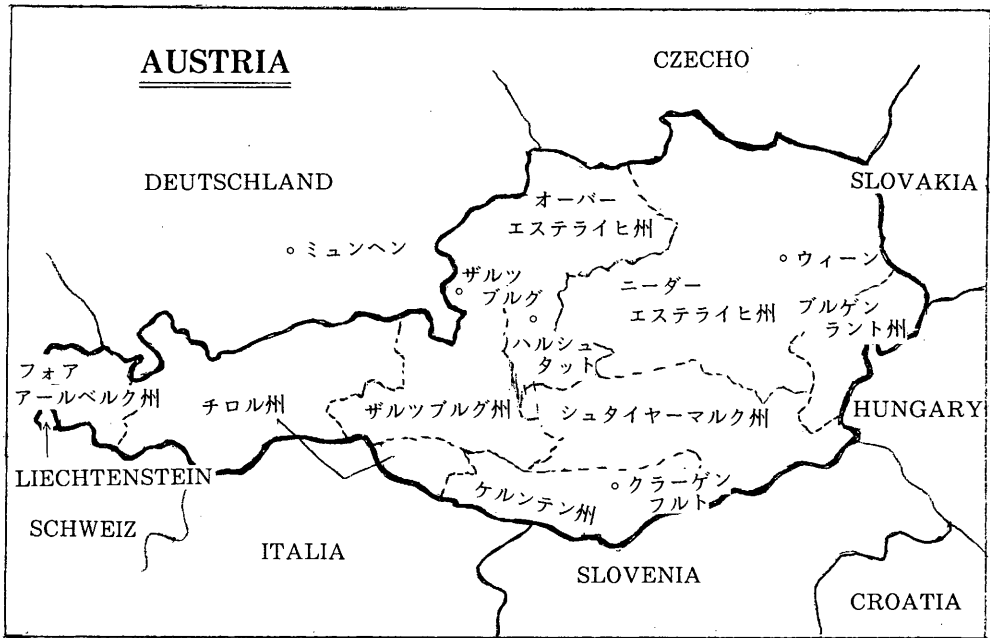
原始的信仰を根底にして、その上に仏教や儒教・キリスト教などの外来宗教が伝来し、それが摂取受容され土着化する過程において、さまざまな信仰の形態が成立してきたと考えられる。あえて相違点をあげれば、ビルトシュトックはキリスト教を基盤にしている緻密さが感じられ、道祖神は民俗神から発生したもののため素朴である。

そして、この論中でとりあげたビルトシュトックや道祖神は、整った広大な教会や寺院に祭られることはない。欧州では、神を呼び寄せる目印として、日本では神の所在を示す目印として、教会や寺院の境内の片隅・路傍・四辻・村境・峠・山中・川原さらに湖畔などの草堂や木祠・石祠・あるいは石像や自然石をそのまま建ててそこを

神のおるべき場所としたのである。またタビビトである人々が集落をつくり、社会を形成していった時から、その集落の中に悪霊や災難が入り込んでくるのをさえぎり、それぞれの安全を祈願するために造りあげた信仰だと考えられるのである。

ビルトシュトックは12～14世紀、道祖神は12～13世紀以降、その時代時代によって、その姿形は変わりながら、また人々の祈願する内容も変わりながらも、現代に生き続けて、庶民の心の平安を支え続けている。

オーストリアの人々は、お互いの平安を祈りつつ『グリュース・ゴット！』と挨拶するのが印象的であった。



〔地図1〕

謝 辞

ご指導下さいました井上章教授に深く感謝申し上げます。

フランス・ブルターニュ地方のカルヴェールの資料をご提供下さいましたパリ在住の篠原士世氏、及びオーストリアについての情報をご提供下さいましたオーストリア政府観光局に深く感謝申し上げます。

註

- 1) 「十字架のフォークロア」 p. 37より引用
- 2) 「十字架のフォークロア」 p. 51より引用

参考文献

- 1) 『ヨーロッパの祭と伝承』 植田重雄著
- 2) 『十字架のフォークロア』 中嶋 斉著
- 3) 『ヨーロッパ美術を読む旅』 柳沢保雄著

- 4)『ケルトの残照』堀淳一郎著
- 5)『道の文化史』シュライバー著
- 6)『ケルト美術への招待』鶴岡真弓著
- 7)『日本石仏事典』庚申懇話会編
- 8)『日本石造美術辞典』川勝政太郎著
- 9)『民俗学辞典』柳田國男著
- 10)『道祖神と地蔵』大島建彦著
- 11)『旅と交通の民俗』北見俊夫著
- 12)『民間信仰史の研究』高取正男著
- 13)『日本の美術4』松島 健著